



TITLE:

京大広報 No. 599

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 599. 京大広報 2005, 599: 1857-1872

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196499>

RIGHT:



京大広報

No. 599

2005. 3

目次

平成17年度授業料について……………1858	〈洛書〉	
〈大学の動き〉	歩く楽しみ	五十棲泰人……1865
「第5回京都大学国際シンポジウム」	〈話題〉	
の開催……………1859	京都大学未来フォーラム(第10回)を開催……………1866	
平成17年度入学選抜学力試験の第1段階選抜	留学生の見学旅行を実施……………1866	
状況……………1860	〈訃報〉……………1867	
〈部局の動き〉	〈日誌〉……………1870	
国連防災世界会議テーマセッション3.8	〈医療技術短期大学の動き〉	
「洪水及び斜面災害に関する研究と災害軽減	平成17年度専攻科助産学特別専攻入学者	
のための新たな国際イニシアティブ (IFI &	選抜試験を実施……………1871	
IPL)」の開催……………1861	〈お知らせ〉	
第1回京都大学の教育を語る	原子炉実験所一般公開について……………1871	
一先輩からのメッセージの開催……………1862	京都大学未来フォーラム(第13回)の開催に	
情報学研究科が企業説明会を開催……………1862	ついて……………1871	
〈寸言〉	平成17年度原子炉実験所学術公開日に	
地方にも京大の門戸を広く 山田光雄……1863	ついて……………1872	
〈随想〉	〈編集後記〉……………1872	
デジタルとコピー		
名誉教授 矢島脩三……1864		



第5回京都大学国際シンポジウムの開催
—関連記事 本文 1859 ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

平成17年度授業料について

2月17日（木）開催の臨時役員会において、平成17年度授業料について、文部科学省令の改正により授業料の標準額が改定された場合には、改定標準額と同額の授業料とすることなどを決定いたしました。概要は以下のとおりです。

平成17年2月17日
京 都 大 学

平成17年度授業料について

平成17年度政府予算案に、平成17年度から国立大学授業料標準額を学部・大学院で現行の520,800円から535,800円に改定することが盛り込まれております。

政府予算案の国会での審議の結果を待って、授業料に関する方針を決定するのが本来の順序ではありますが、本学では、受験される皆様に、平成17年度の本学の授業料がどうなるかについて早くお知らせする必要があると考え、授業料に関する検討を重ねてまいりました。その結果、本学においては、文部科学省令の改正により授業料の標準額が改定された場合には、改定標準額と同額の授業料とすることを、本日の役員会で決定いたしました。

これと同時に、本学として学生に対する支援方策についても検討を重ね、現在行っている授業料免除措置に加え、本学独自の措置として、新たに、経済的事情により修学が困難である者に対する授業料減免措置を講ずることとし、約3千万円をこれに充てることといたします。

本学に内示された平成17年度予算案では既に、授業料標準額の改定額に相当する本学の教育研究経費として約3億円が削減されております。このため本学の授業料を改定しない場合には、これに見合う教育研究経費を削減する必要があります。

教育研究経費の効率化係数及び経営改善係数による削減に加えて、更に3億円の削減が行われたことによって、本学の教育研究の質の維持に重大な支障を来すことが懸念され、このような決定を行ったものです。

本学におきましては、国立大学の授業料等学生納付金については、これまで増額改定とならないようあらゆるところで働きかけを行ってきたところであり、今後ともそれを継続していく所存ですので、関係各位のご理解とご協力をお願いいたします。

大学の動き

「第5回京都大学国際シンポジウム」の開催

京都大学国際シンポジウムは、京都大学の学術研究を世界に向けて発信することを目的に、海外で開催することを前提として平成12年度から開催されてきた。



第5回に当たる今回は、生命科学系のシンポジウムをアジアで開催することが計画され、1月27日（木）～29（土）の3日間シンガポールの Biopolis にて、国際シンポジウム“Regulation of cell fate and cell function”として開催された。本学からは21世紀COE プログラム「先端生命科学の融合相互作用による拠点形成」に参加する生命科学研究科とウイルス研究所のメンバーが参加し、開催にあたっては国家の施策として生命科学研究に重点的に取り組んでいるシンガポールの National University of Singapore (NUS) との共同で実施した。



シンポジウムでは、本学からの12名の講演者を含む28の講演と、本学の大学院生22名の発表者を含む48の

ポスター発表が行われ、充実した研究発表と活発な討論が行われた。Web サイトでの事前登録者が395名、実際には計367名の参加者（本学から42名、シンガポールから325名）を得た。シンガポールでは、元ウイルス研究所所長伊藤嘉明教授が研究室を構えて活発に研究を行っており、その協力を得て、シンポジウムを成功させることができた。

本シンポジウムにおいて、本学における高いレベルの生命科学研究の実力をアピールするとともに、現在まさに発展しつつあるシンガポールの生命科学

研究に携わる研究者との交流、また大学院生間の新たな交流が生まれ、今後の研究交流がますます発展することを確信した。

本学から尾池和夫総長、NUSからShih ChoonFong 学長、Agency for Science, Technology and Research の Philip Yeo 長官、小島高明シンガポール日本大使の参加を得たセレモニーだけでなく、「現



在、シンガポールは京都大学に後れをとっているが、追いつき追い越すことを目標にしている」というシンガポール側からの発言、また、生命科学研究を行う7棟の高層ビルが建ち並ぶ新たな研究拠点である Biopolis（シンポジウムの会場が設定された）の有り様は、シンガポールの国をあげての生命科学研究に対する意気込みを印象づけるものであり、本学からの参加者にも大きなインパクトを与えた。

最後に本学から参加した大学院生の感想を示し、本シンポジウムが成功裏に終了しただ



けでなく、未来につながるものであったことを報告する。「サイエンス以外でも先生方の話を真近で聞くことができたこと、シンガポールの勢いを肌で感じ取れたこと、同じ志を持つ友達を作れたこと、どれも自分にとって大変貴重な体験だったと思います。」

関係各位にお礼を申し上げたい。

（国際交流委員会）

平成17年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成17年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月10日（木）、選抜結果が志願者に通知された。
学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜		第1段階選抜 の予告倍率	
						合格者数	倍 率		
総合人間学部	前期 文 理 系	前	105 ^人	362 ^人	3.4 ^倍	354 ^人	3.4 ^倍	—	
		後	55	209	3.8	203	3.7	(注1)	
		後	50	153	3.1	151	3.0	(注2)	
	後期	後	15	248	16.5	240	16.0	約12.0倍	
文 学 部	前期	前	190	562	3.0	562	3.0	約3.5倍	
教 育 学 部	後期	前	30	449	15.0	303	10.1	約5.0倍	
	後期	前	40	150	3.8	150	3.8	約3.5倍	
法 学 部	後期	前	20	211	10.6	150	7.5	約5.0倍	
	後期	前	300	922	3.1	922	3.1	約3.5倍	
経 済 学 部	前期 一 般 論	前	10	363	36.3	287	28.7	約8.0倍	
		後	210	776	3.7	774	3.7	—	
		後	160	525	3.3	524	3.3	約3.5倍	
	後期	後	50	251	5.0	250	5.0	約5.0倍	
理 学 部	後期	前	20	792	39.6	587	29.4	約7.0倍	
	後期	前	280	833	3.0	811	2.9	(注3)	
医 学 部	後期	前	31	889	28.7	875	28.2	(注4)	
		後期	前	213	605	2.8	559	2.6	—
	医 学 科	後期	前	30	365	12.2	307	10.2	—
		後期	前	90	324	3.6	279	3.1	約3.0倍
	保 健 学 科	後期	前	10	162	16.2	104	10.4	約10.0倍
		後期	前	123	281	2.3	280	2.3	—
	看護学専攻	後期	前	20	203	10.2	203	10.2	—
		後期	前	63	110	1.7	110	1.7	約5.0倍
	検査技術科学専攻	後期	前	7	73	10.4	73	10.4	約5.0倍
		後期	前	30	74	2.5	73	2.4	約5.0倍
	理学療法専攻	後期	前	7	72	10.3	72	10.3	約5.0倍
		後期	前	15	56	3.7	56	3.7	約5.0倍
	作業療法専攻	後期	前	3	31	10.3	31	10.3	約5.0倍
		後期	前	15	41	2.7	41	2.7	約5.0倍
薬 学 部	後期	前	3	27	9.0	27	9.0	約5.0倍	
		後期	前	70	222	3.2	222	3.2	約3.5倍
工 学 部	後期	前	10	151	15.1	151	15.1	約10.0倍	
		後期	前	857	2166	2.5	2166	2.5	約3.0倍
	地 球 工 学 科	後期	前	98	923	9.4	828	8.4	—
		後期	前	166	353	2.1	353	2.1	—
	建 築 学 科	後期	前	19	225	11.8	225	11.8	約12.0倍
		後期	前	72	243	3.4	243	3.4	—
	物 理 工 学 科	後期	前	8	120	15.0	80	10.0	約10.0倍
		後期	前	211	539	2.6	539	2.6	—
	電 気 電 子 工 学 科	後期	前	24	195	8.1	192	8.0	約8.0倍
		後期	前	117	338	2.9	338	2.9	—
	情 報 学 科	後期	前	13	98	7.5	91	7.0	約7.0倍
		後期	前	81	155	1.9	155	1.9	—
	工 業 化 学 科	後期	前	9	102	11.3	90	10.0	約8.0倍
		後期	前	210	538	2.6	538	2.6	—
農 学 部	後期	前	25	183	7.3	150	6.0	約6.0倍	
		後期	前	233	590	2.5	590	2.5	約3.5倍
	後期	後期	前	67	703	10.5	703	10.5	—
		後期	前	19	168	8.8	168	8.8	約10.0倍
		後期	前	9	114	12.7	114	12.7	約10.0倍
		後期	前	11	108	9.8	108	9.8	約10.0倍
		後期	前	9	110	12.2	110	12.2	約10.0倍
		後期	前	12	159	13.3	159	13.3	約10.0倍
後期	前	7	44	6.3	44	6.3	約5.0倍		
合 計			2829	12282	4.3	11541	4.1	—	
前 期	前	2498	7188	2.9	7110	2.8	—		
	後 期	331	5094	15.4	4431	13.4	—		

- (注1) 総合人間学部前期(文系)は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注2) 総合人間学部前期(理系)は、大学入試センター試験の5教科7科目の合計得点が900点満点中620点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注3) 理学部前期は、大学入試センター試験の5教科7科目の合計得点が900点満点中600点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注4) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- 備考 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部(後期)10名、経済学部(後期)20名の募集人員に加える。

〔外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)〕

学部名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法 学 部	20人以内	32人(1.6倍)	20人(1.0倍)
経 済 学 部	10人以内	33人(3.3倍)	21人(2.1倍)

部局の動き

国連防災世界会議テーマセッション3.8「洪水及び斜面災害に関する研究と災害軽減のための新たな国際イニシアティブ(IFI & IPL)」の開催

1月18日(火)～22日(土)にかけて神戸市ポートピアホテルにおいて国連防災世界会議(UN/WCDR)が開催され、開会式のあった初日には天皇皇后両陛下および小泉総理大臣が出席し、国内外の高い注目を集めた。本学では、ユネスコ、文部科学省、国際斜面災害研究機構等とともにテーマセッション3.8「洪水及び斜面災害に関する研究と災害軽減のための新たな国際イニシアティブ(IFI & IPL)」を組織した。

当日は、Hans van Ginkel 国連大学長の司会のもとで、松浦晃一郎ユネスコ事務局長、M. Jarraud 世界気象機関事務局長らとともに、井上和也防災研究所長が京都大学を代表して挨拶を行い、B. Rouhban ユネスコ防災課長、P. Lyttle 米国地質調査所地すべりプログラム長らとともに本学防災研究所の佐々恭二教授が国際斜面災害研究機構(ICL)会長として、国際斜面災害研究計画(IPL)と京都大学・ユネスコ・ICL 合同 UNITWIN 共同事業を含む講演を行った。

本セッションには、木谷雅人文部科学省審議官(研究開発局担当)、中村隆行文部科学省防災科学技術推進室長ほか、各国政府代表らが出席し、約70名の定員の会場は満席で立ち見があふれ盛会であった。さらに事前に本学時計台記念館におけるICLとその後援機関である国連諸機関との準備会合を踏まえて、ユネスコ、世界気象機関(WMO)、国連食糧農業機構(FAO)、国連防災世界会議戦略(UN/

ISDR)、国連大学(UNU)、国際科学会議(ICSU)、世界工学団体連盟(WFEO)による新しい国際協力の枠組み「地球システム危険度評価と持続できる災害マネジメントのための研究と学習に関する協力」の同意書とこの傘の下で個別の災害に対する最初のモデルとして、「Landslides: 斜面災害」に関する協力覚書をICLと参加7国際機関の間で締結することが提案され、現在、各参加予定機関において同意書への承認手続きが進んでいる。なお、22日のUN-WCDR 閉会式で公表された成果報告書には、Plenary セッションでのWMO、UNU その他からの発言や本セッションでの議論を反映して地震と共に斜面災害防災の重要性が強調され、斜面災害研究と学習に関する国際的取り組みが今後世界的に強化される道筋をつけることができた。

(防災研究所)



セッション前の主要参加者による記念写真、前列左2番目から井上所長、佐々教授、Erdelen ユネスコ副事務局長、Ginkel 国連大学長、Nagy ユネスコ水科学部長、木谷文部科学省審議官

高等教育研究開発推進センター学生・教員教育交流会プロジェクト 第1回京都大学の教育を語る ― 先輩からのメッセージ ― の開催

高等教育研究開発推進センターは、2月17日(木) 時計台記念館国際交流ホールにおいて、教員、学生、卒業生等約100名の参加を得て、学生・教員教育交流会プロジェクトWG4による「第1回京都大学の教育を語る―先輩からのメッセージ―」を高等教育研究開発推進機構の後援により開催した。

同センターが昨年立ち上げた学生・教員教育交流会プロジェクトは、学生と教員双方の共同参画・相互評価による相互作用を通じて、新たな本学の教育と学生の知の探求の在り方を追究していく教育改革プロジェクトである。今回のイベントは、この活動を学生・教職員のみならず本学卒業生や本学の教育



に関心を持つ方に広く知ってもらい、この相互作用のスパイラルの中への参加を期待して企画された。

イベントは、林 哲介高等教育研究開発推進センター教授から、学生・教員交流会活動に関する報告の後、「京大らしい教育のあり方」をメインテーマとするパネル討論第Ⅰ部において、佐藤 進松本大学教授から「地域連携の観点」、井上一郎京都産業大学教授から「産学連携の観点」及び曾我正和岩手県立大学教授から「初年次からの研究室配属」について話題提供があった。引き続き行われた懇親会を兼ねたパネル討論第Ⅱ部において、大阪ガス(株) 岩井博行氏、日本アイ・ビー・エム(株) 山岡喜紹氏及び(株) ケー・ジー・ティ 吉川慈人氏をパネリストとして、多数の学生、教員、卒業生等による活発な議論、意見交換の後、最後に丸山正樹センター長による総括があり、盛会のうちに終了した。

本年4月には本プロジェクトWG3による企画「第1回京都大学・大阪大学合同イベントー大学が変わる・自分が変えるー」が開催される予定である。
(高等教育研究開発推進センター)

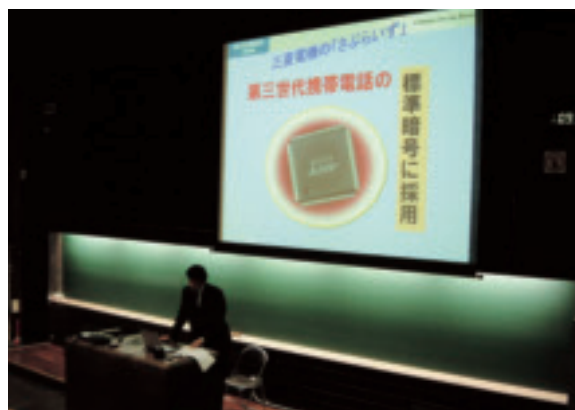
情報学研究科が企業説明会を開催

情報学研究科は、2月17日(木)～18日(金)の2日間、修士課程1年・同2年(博士後期課程進学予定者)・博士後期課程の学生を対象に企業説明会を工学部電気総合館大講義室と工学部8号館大会議室で開催した。

初日は、17社の企業が30分の持ち時間でアピールするシステムを採用(タイムキーパーは修士課程の学生)し、約150名の学生がガイダンスを熱心に聞き入った。

2日目は22社の企業が個別説明のための各ブースに分かれ、学生自身が関心のある企業のブースに出向き説明を受けるシステムを採用し、一人の学生が数社を掛け持ちで出向くなどして、大変な盛況ぶりであった。

この催しは、学生にとって大変有意義なものとなり、企業側からも来年も是非このような機会を設けて頂きたいと多数の希望が寄せられるものとなった。
(大学院情報学研究科)



寸言

地方にも京大の門戸を広く

山田 光雄



昭和22年京都大学医学部を卒業し第二内科に入局、教授の内科学会会頭講演の一翼を担って成果をあげるべく、肝の生検を百例近く行った。それを学会に発表した時は、数も内容も日本一であった。この成果は私が命ぜられてやっただけで、私の力は半分にも及ばない。肝の組織の作り方や、診断、カラー写真にとる。これらを手をとって教えてくれた先輩、カラー写真は当時、自分で現像するのが常であったが、キャノンの社長が叔父だと云う先輩が一手に引き受けてくれた。これらの標本をすべて見て、病理の助教授の天野重安先生は、急性肝炎→慢性肝炎→肝硬変→肝癌の経過を洞察され論文にされた。この構想の様に、その後50年肝炎学は進み、ノーベル賞学者も数名出して肝炎学は今や完成されつつある。天野先生の様な方がおられることが京都大学のすごいところで、学会で天野先生に質問されたら決して逆らってはいけないとの東大の先生の文を読んだ。

岐阜へ帰って大分たった頃、自治医大の眞弓先生が講演に来られた。演題は「肝臓学のパイオニア達」で、第一のスライドに天野先生の論文の第一頁が示され、天野重安、市田文弘（病理）、山田光雄（内科）とあったと友人から聞いた。私は欠席したが、私が肝臓学のパイオニアの一人に数えられたと知った。肝臓を主に消化器を看板にして父と一緒に病院を経営した。当時は医者が速成され、医学のレベルが低かったので、これらの医師の教育を始めた。毎週、講演に廻った。肝臓病の診断・治療について話し、近くの人々は血液を持って来て診断を乞うた。これらの人々の応援で病院は患者が殺到し、多い日は一日500名以上、往診も県内は勿論、隣の県へも出かけた。多額納税者に毎年なり、トップになって法人化した。この様な隆盛も10年20年と経つと、岐阜大学にも肝臓の教授が来られ、その弟子も出て私の所も下り坂となり、病院も老健が必要となった。

今の岐阜県知事の梶原 拓氏は京都大学出で、以前に建設省に居た時の上司である井上 孝氏もやは

り京都大学出（私の高校の同級生）である。梶原氏が副知事になって岐阜に来た時、井上氏が私を梶原氏に紹介してくださり、以来親しくなった。梶原氏は「ふるさと福祉村」構想を持ち、GNP保険を宣伝していた。一千万円のGNP保険に入ると、その後病気をして介護を受ける様になってもただになる。こうして老後が保証され、老後に蓄える必要がなくなり老人がお金を使い、金が廻る様になり景気が良くなるという構想である。議会で大反対に遭いつぶれたが、「ふるさと福祉村」構想は残り、私には病院があるので、介護保険施設を一セット作った。福祉村にしろと云われ、それは夢の様な話と思っていたが、娘夫婦が主となり老健施設、ケアハウス、特養、グループホームと介護保険開始の波に乗って出来てしまった。

私の例を述べたが、岐阜の様な地方も京都大学出が頑張っている。知事も市長も主な企業も財界もチーフは京都大学出である。私は医学部の同窓会、京都大学の同窓会のお世話をしているが、年々会員が減る。昔はこの地からも京都大学へ行く道が開かれていた。旧制高校の制度は地方の秀才が大学へ行くのに良い制度で、私の同級生も京大医学部へ4人、東大医学部へ1人、他の学部では東大の教授や最高裁の判事になった人もいる。しかし今は医学部は、東大も京大も1人もいない。他の学部は多少いるが少ない。医学部はセンター試験で平均点が90点では駄目、95点ないと入れない。中高一貫の私立高校では、5年ですべての過程を終えて、1年間試験勉強のみする。ある高校から18人も入った。

私は今、京都大学医学部の同窓会の理事をしているのでこの様な情報を知るのだが、この18人が大学へ入り勉強してくれるなら良いが、医学部へ入るのが目的で勉強した人の中には、目的を達成したと思って勉強せず、落ちこぼれが出る。今の様な試験制度では東大や京大は、東京の東大、京阪神の京大となってしまう。京大の将来のため、全国より学生を集める方法がないものかと思う。

（やまだ みつお 社会福祉法人和光会 理事長
昭和22年医学部卒）

随想

ディジタルとコピー

名誉教授 矢島 脩三

20世紀半ばに誕生した「ディジタル型万能電子計算機」である「コンピュータ」は、その後、指数関数的ともいわれる進歩発展を遂げました。情報に係わる分野の隅々まで利用が広がりました。さらに、「どこでも」を意味して「ユビキタス コンピューティング」の時代になるとの説もあります。この分野の技術は通信技術等を含め「情報技術(I T)」と云われ、「I T革命」という言葉も使われました。



直近のこの10年間におけるI Tの進化は、またさらに凄かったと思います。その代表格の「インターネット」と「ケータイ(携帯電話)」の進展は、まるで超新星爆発のように感じます。「仮想空間」、「サイバースペース」などと呼ばれている人類が初めて出会うヴァーチャルな世界も誕生しました。京大百周年の年に筆者は停年退官しましたが、この大変化は、ほぼその後の話ですから、本当に驚きです。

I Tは種々の利便性を社会に提供してきましたが、その一方、I Tは社会を支える基盤となっていますので、その分野のシステム障害は大きな問題となります。

「データ」の信頼性の確保のために、その特殊加工のコピーでもある「検査ビット」が付加されます。これによって、データと検査ビット双方に生じるかもしれない「誤り」を「検出」したり、さらには「訂正」することが可能になりました。これは「誤り制御」の技術と呼ばれています。この技術の採用で、「智慧でもって、物理的には容易に達成することが難しいほどの高い信頼度が得られる」ようになりました。データ圧縮や各種処理の技術とともに、これは「ディジタル」が重宝される由縁となっています。

この「誤り制御」の技術によって、我々が日常利用しているC DやD V Dのデータが信頼できるようになり、インターネットもケータイも可能になりま

した。直近では、土星の衛星のタイタンの映像を、太陽雑音や銀河雑音にかき消されない「深宇宙通信」によって見る事が出来ました。また、「未来への通信」である「ディジタルアーカイブ」が叫ばれることになりました。

さらに、システムの構成方法で信頼性を上げる努力が払われて、「耐障害システム」や「ディペンダブルシステム」の構築が追求されてきました。例えば、システムも「2重系」のように「多重化」します。一方を東京に、もう一方を大阪に配置して、万が一に備えるといった手法です。システムは従前の「集中型」とともに、用途により「並列システム」や「分散協調システム」など、「集中と分散を調和させて信頼性を向上させる」システム的な工夫がなされてきました。

去年は、I T分野のシステムでも重大問題である「災」に象徴されるような年となって心が痛みました。「災の制御」のためにI Tも種々活用が進んでいるとのことで、期待しています。

昔、複数の写本というディジタルのコピーが存在したので、誤り訂正もされて、例えば、「万葉集」は千数百年もアーカイブされたのではないのでしょうか。ところで話は飛躍しますが、「京都」の場合、「小京都」というコピーの存在で、昔、「応仁の乱」で「都は野辺」となっても、復興が容易であったのでしょうか、それとも、あまり関係が無かったのでしょうか。

現在、「実の京都」に加えて、母校の研究者は、その「3次元コピー」のような「仮想空間の京都」を研究しておられるようです。筆者のような爺さまは、クローンというコピーは駄目らしいので、迷惑かもしれませんが、この新しい「仮想空間」で「アバター(化身)」にさせていただいて「仮生?」を優雅に過させていただきませんか。

(やじま しゅうぞう：元工学研究科教授：平成9年退官：専門は情報工学)

洛書

歩く楽しみ

五十棲 泰人

大学院時代のあることがきっかけで、私は自動車を持たないことに決めた。それ故、自動車免許も未だ取得していない。子供が生まれたときは妻が教師をしており車が必要になった。車を買って妻が運転した。私は助手席で子供を抱いて妻に従った。その様子は周りに異様に映ったようで、格好が悪かった。はじめての留学でパリに滞在したときは、靴底に穴が開くまでパリ市内とその近郷を歩き回った。1年間の滞在で5足も履き潰した。フランス国内の長距離旅行を楽しんでいる友人をみて、自動車がないことを少々悔やんだ。車がなくて困ったのはこの程度である。



車がないためか、私は歩くことが好だ。好きといっても、山を歩くようなことはほとんどしない。大学へは自宅近くの木幡駅から電車に乗り三条または出町柳で降りて、鴨川を医学部構内の居室まで歩く。三条で降りると片道3250歩、出町柳で降りると3100歩である。歩数は、私を監視するため妻が与えた贈り物、すなわち散歩計付携帯電話で分かった。学内や実験室を動き回る分を入れると1日10000歩を超えることが多い。宇治の研究所から今の職場に替わって8年になる。8年間、鴨川べりの散策を楽しんだ。鴨川は環境整備が進むにつれ年々美しくなっている。春には赤、白、黄、紫、色とりどりの花が順に咲き乱れる。特に、桜がすごい。夏は日差しが強く、歩くほどに汗が滴り落ちる。風は心地よく川のせせらぎが耳によい。朝は病院地区から蝉時雨も聞こえる。秋は川面で遊ぶ水鳥のしぐさに気を取られる。その中にユリカモメを見つけて冬の到来を知る。冬の川辺はさすがに寒い。風のある日は頭から防寒服で身を包み歩く。周りが見えない代わりに、北山の連なった山々が額縁の中の洋画のように目に入る。この冬、京都に久しぶりに雪が降った。鴨川の川辺は雪だけだった。自分の足あとが神聖な場所を汚すように見えた。

出張先でもバス、地下鉄、タクシー等の乗り物を使わないように心掛けています。あえて時間の余裕を

つくり、足で移動する。仕事の関係で東京大学に出かけることが多い。東京駅から地下鉄丸の内線、千代田線に乗り、雑踏の中を人に揉まれて、安田講堂や根津地区に行く。地下歩道の閉塞感、電車の内の圧迫感、外に出ると人と車の不快な雑音に悩まされる。出張のたびに、歩くに値する道を探した。1, 2年して、まずまずと思えるコースを見つけた。東京駅から山手線に乗り上野で降りて、大学まで歩く。途中、恩賜の公園を蛇行し不忍池を抜けて坂道を登る。このコースは、歩数にして3000歩前後で、四季の移ろいを感じさせる。上野の桜は京都より早く咲く。盛りを過ぎた頃、京都への帰り道、薄暗がりの中の舗道に散る花を見るのは寂しい。公園の道はいつも暗い。それに引き換え、不忍池の抜け道は明るい。池の水はきれいといえないが、魚や他の生き物に溢れている。季節に応じた水鳥もいる。春の終わりには池一面に睡蓮の花が咲く。睡蓮の葉は目立って大きい。大きな葉の群れの中に見え隠れする桃色の花は緑に映えて美しい。時間を忘れて見惚れてしまう。このコースを見つけて以来、東京への出張が苦痛でなくなった。

都会の喧騒の中を歩くのは辛い、車の少ない街中の家並みの間を散策するのは楽しい。歴史の名残を示す石碑、地蔵、建物など小さい発見が一杯あるからだ。車が街に溢れるにつれ、気を抜いて歩ける場所が少なくなっていく。その分歩く楽しみが減る。一方、道路網の進展がすごい。少し郊外に出ると高速道路が建設されているのが目に付く。数ヵ月後同じ場所に、少年時代に見た漫画の中の未来都市さながら、立体交差の道路が現れる。確かに車はますます便利なものになる。多くの人にとって必需品であることは間違いない。それにもかかわらず車を持たない私を、人は変わり者だという。

車のない不便さを考慮しても、私は歩くのが好きだ。これまでの生活に感謝して、妻に言うときがある。

“車はいらない。足がある。”

(いそずみ やすひと 放射性同位元素総合センター教授)

話題

京都大学未来フォーラム（第10回）を開催

京都大学では、恒例となった様々な分野で活躍する本学卒業生「OB・OG」を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第10回目を、1月24日（月）の夕刻に時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催した。

今回は、文学部を卒業され、現在は俳人協会常務理事・関西支部長として活躍されている辻田克巳氏を講師に招き、教育学研究科の山中康裕教授の司会で、「俳句という玩具」と題して講演が行われた。

講演では、俳人としての豊富な経験をもとに、俳句の素材は日常のもので、俳句はそこから生み出される非日常を表す自己完結的なものであり、余韻を残しておくことが大事であること。俳句は詩であり、詩である限り新しい何かを創造しなければならないこと。人間が生きていくには、「遊ぶ」という時間と空間が必要であり、物事のおもしろみや意味を十分理解し、味わい楽しみながら詠むことが大切である



と述べられた。

また、生き物は季節とかかわって存在するものであるからこそ、俳句は季語を大切にしていること。俳句を詠むことは、俳優が舞台に上がるのと同様に真剣勝負であることなどを、多様な俳句を例にだしながらユーモアを交えて語られた。参加した約200名は、メモをとりながら熱心に聞き入っていた。

留学生の見学旅行を実施

研究・国際部留学生課は、3月1日（火）から3日（木）にかけて九州への見学旅行を実施した。今回は、2004年3月1日以降に入学した留学生が対象である。参加者78名（33カ国からの留学生71名、田村 武留学生センター長、日本人学生チューター4名、留学生課及び広報課職員各1名）は、まず初日の夜7時に時計台前に集合した後、バスで神戸港まで行き、そこからフェリーに乗り換えて、一晩かけて九州へ移動した。

翌朝、大分県別府港から再びバスで移動し、真っ赤な「血の池地獄」、青い「海地獄」、噴煙を上げる



中岳、阿蘇の歴史を紹介する火山博物館などを見学した。

最終の3日目は、熊本城、福岡タワーを見学し、新幹線で京都への帰路についた。日本に来て間もない留学生達にとって今回の旅行は、友人をつくる貴重な機会であり、九州の日本の自然や田舎の風景、フェリーや新幹線、浴衣、温泉などを初めて体験できた有意義なものであったようである。今後は、同行スタッフの確保と、日本人学生の参加検討が課題であろう。



訃報

このたび、^{よしづみえいざぶろう}吉住永三郎名誉教授、^{ささき つな}佐佐木 綱名誉教授、^{かわばたあいよし}川畑愛義名誉教授、^{まつもと まこと}松本 誠名誉教授、^{よしおかげん じろう}吉岡健二郎名誉教授、^{あきむねひでお}秋宗秀夫名誉教授、^{なか ひさお}中 久郎名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

吉住 永三郎 名誉教授



吉住永三郎先生は、平成16年12月16日逝去された。享年84。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業、株式会社神戸製鋼所勤務、京

都大学工学部助教授を経て、昭和30年教授に就任、探査工学講座を担当された。昭和58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、お亡くなりになるまで財団法人物理探鉱研究会理事長を務められた。

先生は物理探査、中でも電気、電磁探査に関する

研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、抵抗網の地下構造模型実験装置の開発、 $\rho a - \rho u$ 探査法の開発において多大の貢献をされた。主な著書に『演算子数学入門』等がある。

また、(社)物理探査学会、(社)資源・素材学会、鉱山地質学会などにおいて、会長、理事、支部長等の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成6年4月勲三等旭日中授章を受けられた。

(大学院工学研究科)

佐佐木 綱 名誉教授



佐佐木 綱先生は、平成16年12月30日逝去された。享年73。

先生は、昭和28年京都大学工学部土木工学科を卒業、同大学大学院工学研究科修士課程を修了の後、京都大学工学部助手、熊本大学工学部講師、京都大学工学部助教授を経て、昭和41年教授に就任、運輸交通計画講座ならびに人間環境設計学講座を担当され、教育・研究指導を通じて多くの

人材の育成に尽力された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、本学大型計算機センター運営協議会委員、安全

委員会委員等を務め、大学の管理運営に貢献された。

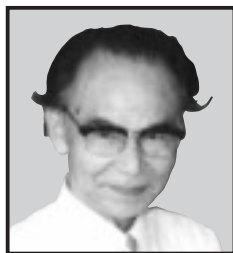
本学退官後は、平成6年4月から同11年3月まで近畿大学理工学部教授を務められた。

先生は、わが国における交通工学の先駆者として活躍され、道路計画と交通管制の方法論確立に貢献され、さらに、各地の風土に根ざした地域計画論を提唱された。(社)土木学会評議員、(社)交通工学研究会副会長等を務められ、我が国の学術研究の進展にも貢献された。代表的著書に『交通流理論』、『風土とまちづくり』等がある。

また、道路計画、都市計画に関する各種審議会委員等を歴任された。

(大学院工学研究科)

川畑 愛義 名誉教授



川畑愛義先生は、1月23日逝去された。享年99。

先生は、昭和6年京都帝国大学医学部を卒業後、京都市衛生試験所技師、厚生省技師、日本大学教授を経て、同25年京都大学教養部（吉田分校）教授、同44年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、京都府衛生研究所長に就任し、昭和46年京都府公害研究所長を兼任された。昭和48年退職後、日本生活医学研究所長に就任された。教養部在任中は、保健体育教室初代の主任教授として、その基礎確立に尽力されると共に、教養部全体の運営や発展に貢献された。

先生の専門は、公衆衛生学および学校保健学であり、数々の論文、著書を発表し、多くの人材を育成してこられた。特に栄養学ならびに食品衛生は、先生が厚生省在任中から研究を続けておられ、学童の栄養と発育発達の関連および学校給食の研究等に優れた研究業績が数多くある。また、学校保健におけ

る目標を先ず心身の調和におき、特に精神衛生を重視し、宗教・哲学にも深い関心を寄せ、当時学生の死亡理由の第1である自殺の原因について研究され、その予防についても尽力された。

これらの研究成果は、国際的にも注目され、先生は、多くの国々において講演をされている。特に、本学退官後の昭和48年には、アメリカの「米国仏教団」から特招講師として招待を受け、アメリカの国内で84回、カナダの国内で7回、宗教哲学と信仰について講演を行われた。その結果、カリフォルニア州の首都・サクラメント市から名誉市民の称号が授与された。

また、先生は多くの学術団体の発展にも貢献された。主だった学会の大会会長としては、第6回日本体育学会、第15回日本学校保健学会、第20回日本民族衛生学会があり、各学会において長年評議員や理事を務められ指導的役割を果たしてこられた。これらの一連の功績により、昭和52年勲三等旭日章を受けられた。

（大学院人間・環境学研究科）

松本 誠 名誉教授



松本 誠先生は、1月23日逝去された。享年84。

先生は、昭和19年京都帝国大学理学部を卒業後、不二鋼材株式会社勤務、兵役従事、同志社工業専門学校助教授、同志社大学助教授を経て、同25年京都大学教養部助教授、同28年理学部助教授、同39年教養部教授に就任された。同59年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、引き続き聖徳学園岐阜教育大学教授に就任、同62年同大学退職後は、大阪工業大学園摂南大学工学部教授に就任、平成4年に退職するまで、研究活動、教育活動が続けられた。教養部においては、人事委員長、図書委員長および学生部委員会委員などを務められ、

大学と、教養部の管理運営にも貢献された。

先生の専門は、微分幾何学であり百編に及ぶ論文、3編の著書において独創的な研究成果を発表し、多くの優れた人材を育成した。先生の研究は主に二つの分野に大別される。前者は、リーマン空間を高い次元のユークリッド空間に挿入する理論を発展させ、一般相対性理論にも応用し、シュバルツシルド宇宙を6次元ユークリッド空間に挿入する一般理論を展開したことであり、後者は、フィンスラー幾何学をファイバーバンドルの接続理論により再構成を行ったことである。

これらの研究成果は世界的にも注目され、先生は、多くの国々において講演をされている。平成3年には、コシュート大学（ハンガリー）でのフィンスラー幾何学とその応用のシンポジウムにおいて招待講演

を行い、同大学より名誉博士号を日本人として最初に授与された。また同年、クザ大学（ルーマニア）より名誉教授号を授与された。

これら一連の功績により、平成6年勲三等旭日章を受けられた。

（大学院人間・環境学研究科）

吉岡 健二郎 名誉教授



吉岡健二郎先生は、2月2日逝去された。享年78。

先生は、昭和26年京都大学文学部哲学科を卒業後、同大学大学院（旧制）、同大学文学部助手、同志社大学専任講師、同大学助教授を経て、同43年4月京都大学文学部助教授に就任、同48年3月教授に昇任し、以後17年余りにわたり美学美術史学第一講座（美学芸術学）を担当され美学美術史学を学ぶ多くの学生を育ててこられた。平成2年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和54年1月より同55年1月まで評議員、同年同月より同56年1月まで京都大学文学部長を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、京都造形芸術大学芸術学部長として大学の発展に寄与され、さらに静岡県立美術館館長として美術館の発展にも尽力された。

先生は、昭和48年近代芸術学の成立史に関する研究（『近代芸術学の成立と課題』）により博士号を取得され、比較芸術学をわが国に紹介された。また先生は、これらの研究を中心に、わが国の美学芸術学に対して重要な研究成果を公にされた。さらにはこのような研究教育活動とともに、美学会委員として長年学会の発展に尽くされるとともに、評議委員を務められた。

先生のこのような多くの業績に対して、平成16年11月瑞宝中綬章を授与された。

（大学院文学研究科）

秋宗 秀夫 名誉教授



秋宗秀夫先生は2月16日逝去された。享年74。

先生は、昭和30年3月大阪府立浪速大学工学部電気工学科を卒業され、大阪大学大学院修士課程修了、同博士課程単位修得後、大阪大学工学部助手、講師、助教授を経て、同52年4月京都大学ヘリオトロン核融合研究センター教授に就任、超高温プラズマ加熱研究部門を担当され、核融合の研究に従事された。平成5年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、日本のプラズマ・核融合研究の中心的共同機関であった名古屋大学プラズマ研究所の専門委

員会委員を長期間務め、同委員会の委員長や将来計画委員長を歴任し、全国的な視野に立ったプラズマ・核融合研究の将来計画立案に携わり、核融合科学研究所設立に貢献した。本学退官後も、プラズマ・核融合の研究に専念された。

先生は、プラズマ加熱装置のなかで、とくにイオン源における負イオン生成、加速、余剰電子の離脱の各過程を詳細に研究することにより、重水素負イオン源の独創的な方法を提案したことで知られる。この研究成果は、米国特許や国内特許として公表され、研究、教育の分野において果たされた功績は誠に顕著である。

（エネルギー理工学研究所）

中 久郎 名誉教授



中 久郎先生は、2月22日逝去された。享年77。

先生は、昭和28年3月京都大学文学部哲学科を卒業、同大学院修士課程修了、同博士課程を単位取得満期退学後、

大谷大学専任講師、同助教授を経て、同41年4月京都大学文学部助教授に就任、同53年8月に教授に昇任し、以後12年余りにわたり社会学講座を担当された。平成3年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和61年4月より同63年3月まで京都大学文学部長を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、龍谷大学教授、愛知新城大谷短期

大学学長、愛知新城大谷大学学長を歴任され、また関西社会学会会長、日本社会学会理事を務められるなど、わが国の社会学の発展に尽力された。

先生は、デュルケームの社会理論の斬新な解釈によって、デュルケーム理論の可能性を明らかにされ、わが国での学説研究の主導的な役割を果たされた。さらにそうした社会学説史的考察を踏まえて、現代社会学の諸理論も幅広く研究され、体系的な社会学原論を構築された。主著『デュルケームの社会理論』『共同性の社会理論』『社会学原論』はいずれも学界で高い評価を受け、現代社会の理論的研究を促進する上で多大な貢献をされた。

(大学院文学研究科)

日誌

2005.1.1 ~ 1.31

- | | | | |
|------|-------------------|-----|----------------------|
| 1月4日 | 新年名刺交換会 | 18日 | 教育研究振興財団助成事業検討委員会 |
| 5日 | 財務委員会 | 〃 | 全学共通教育委員会 |
| 6日 | 施設整備委員会 | 19日 | 環境・安全・衛生委員会 |
| 11日 | 役員会 | 〃 | 経営協議会 |
| 〃 | 部局長会議 | 〃 | 国際交流委員会 |
| 13日 | 企画委員会 | 〃 | 国際交流会館委員会 |
| 14日 | 同和・人権問題委員会 | 24日 | 博士学位授与式 |
| 15日 | 大学入試センター試験（16日まで） | 26日 | 教育制度委員会 |
| 17日 | 役員会 | 27日 | 尾池総長のシンガポール訪問（29日まで） |
| 〃 | 学生部委員会 | 〃 | 京都大学国際シンポジウム（29日まで） |
| 18日 | 部局長会議（臨時） | 28日 | 大学入試センター試験実施委員会 |
| 〃 | 教育研究評議会 | 31日 | 企画委員会 |
| | | 〃 | 役員会 |

医療技術短期大学部の動き

平成17年度専攻科助産学特別専攻入学者選抜試験を実施

医療技術短期大学部では、平成17年度専攻科助産学特別専攻の入学者選抜試験を1月7日（金）に実施し、その合格者を1月24日（月）に発表した。

受験者数、合格者数及び入学者は次表のとおりである。

区分	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
助産学特別専攻	20	101	100	20	20

~~~~~

## お知らせ

## 原子炉実験所一般公開について

1. 日 時：4月2日（土）10：00～16：00
2. 場 所：大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目  
京都大学原子炉実験所
3. 内 容：10：00～16：00 ビデオ上映・科学実験体験コーナー  
13：00～16：00 施設見学  
原子炉棟（炉室、ホットラボ）、廃棄物処理棟
4. 申 込 方 法：個人 当日守衛所で受付ます。  
団体（10名以上） 団体名、責任者名、連絡先及び電話番号を記載した申込書（書式自由）  
に見学者名簿を添えて郵送、FAX、又はE-mailでお申し込み下さい。
5. 問い合わせ先：〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目  
京都大学原子炉実験所総務課総務掛  
TEL：0724-51-2310 FAX：0724-51-2600  
E-mail：soumu@rri.kyoto-u.ac.jp

## 京都大学未来フォーラム（第13回）の開催について

様々な分野で活躍する本学卒業生「OB・OG」を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第13回目を株式会社堀場製作所会長 堀場雅夫氏をお迎えし、以下のとおり開催します。多数のみなさんの参加をお待ちしております。

1. 日 時：平成17年4月25日（月曜日） 18：15～19：45（開場17：30）
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
3. 講 演 者：株式会社堀場製作所会長 堀場雅夫氏
4. 定 員：先着500名
5. 対 象：学生、教職員、一般市民



6. 参 加 費 用：無料
7. 申 込 方 法：京都大学ホームページ申込フォームまたは往復はがきにて下記までお申し込みください。  
なお、往復はがきによる申し込みについては、「第13回未来フォーラム参加」と明記の上、住所、氏名、年齢、職業、連絡先を記入し、返信はがきには、必ずご自身の宛先を記入してください。
8. 問い合わせ先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学百周年時計台記念館事務室  
TEL 753-2285（月～金曜日 9時00分～17時00分）  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/11-top.htm>
9. そ の 他：主催 京都大学  
後援 （財）京都大学教育研究振興財団

## 平成17年度原子炉実験所学術公開日について

原子炉実験所では、平成17年度上半期分の学術公開（施設公開）を以下のとおり実施します。

1. 日 時：5月2日（月）  
6月6日（月） 時間は各日とも  
7月4日（月） 13：00～16：00  
8月1日（月）  
9月5日（月）
2. 申 込 方 法：希望日の前々週の水曜日までに団体名、人数、責任者及び連絡先をご記入の上お申し込み下さい。  
（郵送、FAX、E-mail いずれも可）
3. 問い合わせ先：〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目  
京都大学原子炉実験所総務課総務掛  
TEL：0724-51-2310 FAX：0724-51-2600  
E-mail：soumu@rri.kyoto-u.ac.jp

### 編集後記

この冬は、京都にも何年かぶりに雪らしい雪が降った。小生が京都大学に入って最初の冬、かれこれ20数年以上も前になるが、とにかく大雪が降った。雪がめったに積もらない地方出身者にとって、それだけでなぜか京都は凄い所かも知れないと感じたように記憶している。その後も、続けて何年かは年に数回は必ず積雪した。京都にはたくさんの歴史的建造物があるが、たまに降る雪で化粧された神社・仏閣というものは妙に風情があるように思う。しかし、ここ十年ぐらいは、その美しい雪景色もあまり見る事ができなかった。暖かいからである。やはり、地球環境がどんどん変わってきているせいだろうか？法人化した京都大学でも、それを取り巻く環境は大きく変化した。むしろ、良い方向に変らなければならないのであろうが、春夏秋冬がなくなるような自然環境の変化だけは御免被りたいと思う。

（飯田記）